

# シカゴ大学大学院図書館学部における研究の概念\*

——創設期を中心に——

吉 田 右 子\*\*

本論文ではシカゴ大学大学院図書館学部 (The Graduate Library School at the University of Chicago) の創設期の図書館学研究を考察することによって図書館学における研究の概念を明らかにすることを試みた。初期 GLS の図書館学研究を検討するにあたって GLS とシカゴ大学他学部との交流関係を分析視点とした。考察の結果 GLS はシカゴ大学の中でも1920年代に最盛期を迎えていた社会学科から研究手法を吸収し図書館学研究に援用していたことが明らかになった。また社会学の研究の概念そのものが GLS の図書館学研究に深い影響を与えていたこともわかった。

## 目 次

はじめに

### 1. GLS 創設史

#### 1.1 GLS 創設前史——開校への道程

#### 1.2 初期 GLS 史——開校から最盛期へ

### 2. シカゴ大学と GLS

#### 2.1 研究環境としてのシカゴ大学

#### 2.2 シカゴ大学と GLS の交流関係

### 3. 初期 GLS における図書館学研究

#### 3.1 初期 GLS の研究状況

#### 3.2 GLS における研究の概念

おわりに

注

はじめに

本稿の目的は、アメリカ図書館学界のパイオニア的存在であるシカゴ大学大学院図書館学部 (The Graduate Library School at the University of Chicago, 以下 GLS と略) の図書館学研究を考察することによって「図書館学における研究の概念」を明らかにすることにある。図書館学においては実践的知識の体系としてのライブラリアンシップから始まって、歴史学・社会学・情

報学などの様々なアプローチがその研究に援用され、次々と新しい研究成果が上がっている。しかしながら図書館学及び図書館学研究の本質を規定するような認識論上の基盤は研究者の間でも一致していないように思える。様々なアプローチとそれらの結果を「図書館学」と呼ぶことはもちろん可能であるが、図書館学を総合的にとらえる視点は学問内部での個別化が進んでいる現在においてこそ重要となるであろう。これまで多くの図書館学研究者が「図書館学とは何か」という根本的なテーマにとりこんできたが、そうした研究の系譜の原点に戻ってすることで図書館学の存立基盤に関してのヒントが得られるのではないかと考えたことが、GLS を本稿のテーマに選んだ動機となっている。

アメリカ図書館学の源を GLS に求めたのは、アメリカの図書館学研究者ハリス (Michael H. Harris) の論文がきっかけになった。彼は1986年に発表された論文「勝敗の弁証法：図書館情報学研究におけるアンチノミー」において社会科学の新しい思想を援用しながら図書館学研究を根本からとらえ直す作業を試みた。この論文の中で彼は図書館情報学の現在の在り方の源を、ウィリアムソン・レポートの勧告により創設された GLS に見出すことができると論じている<sup>1)</sup>。

アメリカにおけるライブラリー・スクールの起源はデュエイ (Melvil Dewey) が1887年に創設したコロンビア大学のライブラリー・スクールまでさかのぼることが

\* 1992年10月19日受理

\*\* よしだ ゆうこ チュービンゲン大学日本文化研究所図書室

でき、デューイはそれまでは知識とも技術とも判別しなかったライブラリアンシップを一つの専門分野へと高めたことで図書館界に大いに貢献した。しかし学問たりうる図書館学の要請, 19世紀末のアメリカの専門教育再編成の進行, ウィリアムソン・レポートの公刊など複数の要因が重なって高度な研究・教育レベルを持つライブラリー・スクールの設立案が浮上し, この結果1928年にGLSがシカゴ大学の中に大学院課程の専門教育コースとして新しく設置されたのであった。

GLSができるまで図書館学はどちらかと言えば閉鎖的な状態に置かれていたといえるが, GLSはシカゴ大学他学部から非常に高いレベルの学問的影響を受け図書館学を発展させた。つまりGLSは図書館学を学際分野としてとらえ, 他の分野と積極的に交流を進めて行くと同時に他の学問の中に図書館学を位置づけようとする姿勢を持った研究集団であった。アメリカにおいて図書館学はその後様々な分野からの影響を受けることになるわけであるが, そうした傾向の原点をこのスクールにみることができる。またGLSにおいては, 設立当初から図書館学研究の概念が繰り返し問われ続け, GLSの創設期の歩みは図書館学理論の構築の軌跡としてとらえることが可能なのである。

ライブラリアンシップ教育においてきわめて重要な役割を果たしたGLSについては既に多くの研究がなされているものの, 図書館学教育の通史における一項目としてのみ触れられていることが少なくない。がその中でシェラ (Jesse H. Shera) の *The Foundations of Education for Librarianship* (1972年) は, GLSの成立を図書館学史におけるエポックメイキングな出来事として位置づけ, GLSが1930年代以後のアメリカのライブラリアンシップと図書館学教育において非常に影響力があったことを諸観点から論じた<sup>2)</sup>。またリチャードソン (John Richardson Jr.) は1982年に出版された *The Spirit of Inquiry: The Graduate Library School at Chicago, 1921-51* においてGLSの歴史, 特に【内部事情を関係者へのインタビュー・非公開資料・私信などの資料を用いて詳しく調査した<sup>3)</sup>。創設期のGLSで行なわれた研究の代表格とも言える読書研究に関する著作としては, カレツキー (Stephan Karetzky) の *Reading Research and Librarianship: A History and Analysis* (1982年)<sup>4)</sup>、我が国では河井弘志の『アメリカにおける図書選択論の学説的研究』(1987年)<sup>5)</sup>があり, (図書館学)シカゴ学派の読書研究における研究手法や研究精神が分析されている。GLSにおける歴史研究の成果とその意義については, 川崎良孝の『アメリカ公立図書館成立思想史』(1991年)<sup>6)</sup>に詳しい。

そこで本稿では先行研究ではあまり深く討究されてこなかったテーマ——GLSにおける図書館学研究の概念——を中心に, GLSがいかにして独自の図書館学を確立するに至ったのかという点にしばって考察を行なった。その際, 創設期のGLSの図書館学研究に深い影響を及ぼした「シカゴ大学の研究環境」を論考を進める上での分析視点とした。つまりGLSは1920～40年代の社会学をはじめとする図書館学に应用可能な学問を直接シカゴ大学他学部から取り入れ, 数々の研究テーマを主に実証的な手法で解明することに成功したと言われていたが, その交流は具体的にはどのようなものであったのか, また社会学のどの部分を図書館学に援用したのか, そして研究方法に留まらず研究理念そのものについても取り入れた形跡はあるのかなど, 先行研究では分析されてこなかったいくつかの課題を明らかにすることを試みた。

## 1. GLS 創設史

本章ではまず1880年代からGLSが開校する1920年代までの図書館学教育史において特記すべき項目を概観する。そしてGLS設立に至る経緯と開校後のGLSの歩みをたどる。

### 1.1 GLS 創設前史——開校への道程

GLS設立以前のライブラリアンシップ教育における最も重要な出来事は, 1887年にデューイがコロンビア大学内にスクール・オブ・ライブラリー・エコノミーと命名されたライブラリー・スクールの設立したことであった。この機関はそれ以前には図書館の内部で行なわれていたライブラリアンシップ教育を外部の機関へと独立させたもので, その発足によって図書館学もまた第一歩を踏み出すこととなった。デューイは教育体系という面をとってみればほぼ無に等しかった図書館諸技術ともいうべきライブラリアンシップを, 現場中心の徒弟制度から専門分野へと移行し, 結果としてデューイのライブラリー・スクールは図書館学史における大きな転換点となった。しかしながら高度な教育方法をライブラリー・スクールに盛り込んだとはいえ, デューイのライブラリー・スクールの目的が真理の追求というよりはプロフェッションの向上にあったことは否めず, 過度な技術偏重は図書館学の実務面を強調することにもなり, 理論的な部分は相対的に軽視されていた。ともあれデューイがコロンビア大学にライブラリー・スクールの開校してから30年余りアメリカの図書館界ではこの偉大な先駆者の強い影響のもとで, 専門職たる図書館実務の高度化を目指した教育が一貫して行なわれていた。

しかしながら1900年代に入ってから、アメリカ図書館界を財政面で支配してきたカーネギー財団において図書館に関する見直しが始まり、図書館員の教育方法にも目が向けられるようになるとデューイが築き上げた実務中心の図書館学が再検討されるようになった。カーネギー財団はまず1916年にコーネル大学の経済学部教授ジョンソン (Alvin Johnson) に財団に関連している図書館の調査を依頼し、ジョンソンは図書館員教育が最も急を要する議題であるという趣旨の報告書を財団に提出した<sup>7)</sup>。

この結果を重く見た財団は、1918年にライブラリー・スクールにまとを絞った調査に着手したが、この調査の責任者に選ばれたのがウィリアムソン (Charles Clarence Williamson) であった<sup>8)</sup>。ウィリアムソンはカーネギー財団の調査員となった1919年から3年の歳月をかけて実際にアメリカ国内のライブラリー・スクールを訪問し、また指導的な図書館員と直接コンタクトをとりながら調査を進め、*Training for Library Work* と題されたレポートを1921年に完成させカーネギー財団に提出した。この報告書は訂正・削除を施した上で1923年に刊行されたが、その際タイトルも *Training for Library Service* と変更された。

ジョンソン・レポートとウィリアムソン・レポートをきっかけに、カーネギー財団はその政策課題を図書館建設から図書館サービスとそれを支える図書館員の教育へと移行していった。改革は1920年に図書館員教育について理解の深いケッペル (Frederick P. Keppel) が財団の総裁となると更に具体的に進められるようになり、この時期から図書館員教育のための実質的な援助が始まることになる。すなわち財団は1926年に、ライブラリー・スクールの援助を主眼に置いた「図書館活動推進10年計画」(Ten Years Program in Library Service) を採択した<sup>9)</sup>。以後このプログラムに沿ってライブラリー・スクールの改革が行なわれていくことになるが、その途上で計画の一環でもあった高度な教育レベルを持つライブラリー・スクールの構想が徐々に実現へと向かい結果として GLS の設立をみたのであった。

一方 ALA はカーネギー財団の依頼を受けてライブラリー・スクールの改革を進めていくために、1923年に臨時図書館教育部 (Temporary Library Training Board) を設立した<sup>10)</sup>。1924年に臨時図書館教育部は ALA 図書館学教育部 (Board of Education for Librarianship) と改称し、ライブラリー・スクールにおける教育基準の設定やライブラリー・スクールの認定業務などを行なうと同時に、高度な研究機能を持つライブラリー・スクール (graduate library school) の準備に本

格的に着手した。

ライブラリー・スクールのための複数の候補校の中からシカゴ大学が選ばれた理由を同定することは困難であるが、同大学を強力に推薦したのはシカゴを本拠地とする ALA の事務局長 マイラム (Carl H. Milam) とその片腕ボーグル (Sarah C. N. Bogle) であったと言われ、新しいスクールは最初から ALA と相互協力の上で研究を展開していくことを図書館関係者から望まれていたのである<sup>11)</sup>。

## 1.2 初期 GLS 史——開校から最盛期へ

シカゴ地区へのライブラリー・スクールの誘致は、シカゴ地区の図書館からなるシカゴ・ライブラリー・クラブがライブラリー・スクールのための委員会を発足させた1921年夏に端を発する。同委員会が中心となってライブラリー・スクールのための新しい図書館教育が模索される一方で、シカゴ大学図書館長のパートン (Ernest DeWitt Burton) は急増していた図書館業務に対処できる高度な専門知識を持った図書館員の養成のために、シカゴ大学にライブラリー・スクールが必要であることを学長ジャドソン (Harry P. Judson) に進言した。

またシカゴ大学内部でライブラリー・スクールのための準備が始まった1925年頃よりカーネギー財団でも「図書館活動推進10年計画」の一環として新しいライブラリー・スクールを創設する計画が進んでおり、その最有力候補地としてシカゴ大学が挙がっていた。1923年にパートンが学長に抜擢されるとライブラリー・スクール設立の可能性は更に高まり、1926年6月3日にシカゴ大学評議会がカーネギー財団からの資金受け入れの申し出を受理した時点で GLS が当大学に設置されることが決定した。初代の学部長は教育学専門のワークス (George Alan Works) であった。ワークスは1928年に出された GLS の要項である *University of Chicago Announcement* において、研究活動を GLS の主たる柱としていく方針を明らかにした<sup>12)</sup>。彼は GLS の研究はその発展過程を経て結果として現場を支えるべきであり、研究者・図書館員は相互に関係を保つべきであると主張した。つまり研究者の一方的な研究の成果が図書館学の結果ではなく、現場に新しい知見を付け加えてこそ図書館学は進歩したといえるのであって、図書館学研究の最終目的は図書館員すべてが科学的視点を持ってデリーワークに取り組むことにある、というのがワークスの考える図書館学であった<sup>13)</sup>。

しかしながら大学における純粋な図書館学研究を重視したワークスの姿勢は、GLS 発足後まもなく外部から酷評されることになる。ALA のマイラムとボーグルは

早くも1929年12月に GLS は当初期待されたような機能を果たしていないと GLS を批判し、これに対してワークスは GLS の行なった企図の結果を出すにはあまりに時期尚早であると反論している<sup>14)</sup>。開校後まもなくあらわれたこの対立は、図書館の専門プログラムを望む者と大学院レベルの純粋な研究プログラムを望む者との葛藤の始まりとも言えるものであった<sup>15)</sup>。つまりワークスはライブラリアンシップを学問として確立することを目標に掲げたのに対し、ALA は図書館実務に則した高度な教育を GLS に望んでいたのである。ワークスは ALA の方針をデューイ時代の実務偏重主義となんら変わることはないとして、彼自身は自ら選んだ教授陣とともに研究主体の学部をつくりあげていくことに固執しており、ALA もまた強固に実践にそくした教育を主張、両者の間に和解はみられず溝は深まった。こうした亀裂は開校まもなくワークスが辞任するという結果を招いた。

ワークス辞任後長く学部長不在の時代が続くが、この間に学部長代行を務めたのは、シカゴ大学教育学部から GLS に招聘されたウェイプルス (Douglas Waples) であった。1930年に彼は GLS の開校以来の2年間を総括し、GLS がライブラリアンシップにおける重要な局面に関してそのほとんどを網羅する研究テーマを明確にし、今後図書館学が大学院レベルで研究されていくための基礎を固めたと発表した。そして GLS はシカゴ大学の他学部、特に歴史学・社会学・教育学と研究上の関係を深める目的を持ってシカゴ大学内部に設置されたが、その成果は確実にあらわれ GLS は順調に歩を進めていることを強調した<sup>16)</sup>。

ウェイプルスの後を継いで学部長となったのはウィルソン (Louis Round Wilson) であった。ウィルソンは図書館学出身者であり、創設時から積み上げられてきたアカデミックな図書館学と図書館の現場から望まれる図書館学を融合させようと試みた。彼は結局1932年から10年間 GLS の学部長を務め、ワークス辞任の後揺れ動いていた GLS の態勢を立て直した人物と言ってよい。

たとえば GLS にはウィルソンの時代に至るまで図書館学の基礎教育課程は存在しておらず、従って ALA の定めたライブラリー・スクールの基準とは合致せず、GLS は ALA の基準の枠外にあってユニークな教育を行なう異種のライブラリー・スクールと見なされていた<sup>17)</sup>。ウィルソンはこうした状況を打破すべく GLS において展開するにふさわしい図書館学の基礎教育プログラムを構想し、これを実施した<sup>18)</sup>。その結果1934年に GLS は他のライブラリー・スクール (カリフォルニア大学、コロンビア大学、イリノイ大学、ミシガン大学)

と並んで ALA の定める最高レベルのライブラリー・スクールとして認可された。「図書館学における基礎教育」を主眼とした正規の図書館学教育を取り入れることによって GLS 創設当初の方針が変質し、GLS が他のライブラリー・スクールと類似した機関になりつつあることを懸念する内部の声もあったものの、学部長不在期にあったような GLS のある種の軌道のずれはウィルソンによって修正された。悪化しつつあった図書館界との関係を修復したことは彼のすぐれた経営手腕によるものであった。

このように GLS は学部長の変遷によってかなり方向性が変化しているが、これについて図書館学史研究者の見解は微妙にずれている。たとえばハウザー (Lloyd Houser)、シュレイダー (Alvin M. Schrader) は *The Search for a Scientific Profession: Library Science Education in the United States and Canada* (1978 年) の中で、GLS はウィルソンを学部長として迎えるまでは科学志向を持った図書館学を追究していたが、こうした傾向は次第に弱まり、開校以来 GLS が掲げていた「科学としての図書館学の確立」というスクールの使命はウィルソン時代に完全に消滅したとまで述べた<sup>19)</sup>。これに対しシェラはウィルソンを経営面においても研究・教育面においても高く評価している<sup>20)</sup>。

しかしながら評価に若干の違いはあっても GLS が高度なレベルを持ったライブラリー・スクールとして1930年代からの図書館学を常にリードし、1942年までアメリカにおける唯一の博士号授与機関であったという点も含めてアメリカの図書館学界において圧倒的な影響力を持っていたという事実に関しては評価がわかれることはない。そして GLS が高度な研究レベルをもちえたのは、GLS が社会学科を中心に隆盛を誇っていたシカゴ大学の中に置かれたことと深くかかわっていることが多くの研究者によって指摘されてきた。次章においては創設期の GLS に影響を与えたシカゴ大学について考察するとともに、シカゴ大学と GLS の関係について論じる。

## 2. シカゴ大学と GLS

本章では GLS の研究環境を考える上で無視することのできない1930年代のシカゴ大学に焦点を当て、実際に行なわれていたシカゴ大学他学部と GLS の交流について考察する。GLS はシカゴ大学全体に流れるアカデミックな雰囲気から研究の精神を、そして社会学科・政治学科・教育学科といった図書館学に関係の深い個別分野から研究手法を学び、その上に図書館学固有の研究を重ねて独自の学問体系をつくりあげたのである。

## 2.1 研究環境としてのシカゴ大学

1876年にドイツ式の大学院大学であるジョンズ・ホプキンス大学が設立されて以来、アメリカではハーバード大学、ミシガン大学、コロンビア大学といった大学が学術研究を一層強化する目的をもって改革にのりだした。そしてこれらの高等教育機関改革の動向の最頂点で創設されたのがシカゴ大学である<sup>21)</sup>。

GLS が創設された頃のシカゴ大学は社会学科を中心に隆盛を誇っていた。研究に対してきわめて敏感であった GLS が1930年代のシカゴ大学で行なわれていた新しい学問方法と無縁であったはずはなく、教員・学生ともに貪欲に図書館学と関係が深い社会科学系の研究手法を吸収していったのである。そして中でも GLS に最も大きな影響を与えたと思われるのが社会学科である。社会の中における図書館の位置づけを常に意識しながら図書館学研究を進めていた GLS にとって社会学は手本とするにふさわしい学問であったのである。

シカゴ大学社会学科はシカゴ大学の開学(1893年)と同時に発足し、現実に対する強い問題意識をもった上で、都市社会・人種・文化葛藤・同化などの社会問題を実証主義の精神と質的方法を重視する研究手法によって解明していた。シカゴを研究対象とすることはその当時の社会を研究することとほぼ同義といっても過言でなかったほど、当時のこの都市は社会変動の波に洗われフィールド・ワークに最適な諸要素を備えていた。こうした地理的利点を活かして取り組まれた都市民俗学・都市生態学・社会病理学などがシカゴから育った代表的な社会学であり、同学科の社会学者たちは称してシカゴ学派と呼ばれるようになった。中でも複雑な近代都市の社会関係を人間生態学という新しい視点で分析することに成功したパーク(Robert E. Park)、バージェス(Ernest W. Burgess)はアカデミックな社会調査の先駆者であると同時にシカゴ大学社会学科最盛期の中心人物であり、それ以後の社会学者たちに多大な影響を及ぼすことになる。河井はパークの社会・個人観——個人は所属する社会集団によってある部分が規定されるという前提——の中に、ウェィブルズらの読書調査の立脚点となった社会集団論の起源を見ることができると述べている<sup>22)</sup>。そして更にバージェスの都市理論はウェィブルズ、カーノフスキーらの都市の読書実態調査や、ジョッケルらのシカゴ公共図書館の総合調査へ、主として構造的生態学の発想の面で影響を及ぼしていると分析している<sup>23)</sup>。1920年代初期にシカゴ大学社会学科で行なわれていた多彩な研究をあえてまとめるとすれば次のような点においてその特色をとらえることができるであろう。まず第一

に社会学研究における客観性の強調である。これはシカゴ大学社会学科初代学科長スモール(Albion W. Small)の社会学における基本的な考え方でもあったが、人道主義的な態度を社会学からとり除こうとする厳しい姿勢を持っていたパークによって更に強化された。またシカゴ学派の研究テーマに対するアプローチは経験的調査によって特徴づけることができるが、シカゴ学派のメンバーは自分たちの経験主義を仮説の重視、科学手続きに則った調査データの分析方法などの点で、それ以前のものと同様に区別することを望んだ。

第二番目は参与観察や生活史法といった研究方法にあらわれる質的データ分析(qualitative data analysis)である。都市問題を初めとする様々な社会問題を対象に行なわれた経験調査では、参与観察を通じて得られた観察データ、手紙や日記といった個人資料などのデータを用いて定性分析(qualitative analysis)がなされたが、この質的分析方法はシカゴ学派の特徴ともいえるものでシカゴ・アプローチと呼ばれるようになった。

しかしこのシカゴ・アプローチもその後徐々に変化していくことになる。この変化のきっかけとなったのは、1927年にシカゴ大学社会学科に統計的手法を専門とする社会学者のオグバーン(William F. Ogburn)が迎えられたことであった。オグバーンの出身校であるコロンビア大学社会学科はシカゴ大学社会学科に拮抗するかたちで統計的方法を中心とする社会学を展開させていた。同学科の指導的存在にあったギディングス(Franklin Henry Giddings)は実証主義の立場で統計学を重視し、統計的方法を用いた社会調査を率先して実行し、政策科学としての社会学を発展させており、オグバーンもこうしたコロンビア学派の思想を受け継いだうちの一人であったのである。オグバーンはシカゴ大学においても、統計を重視した講義や研究を積極的に進めたが、シカゴ大学では統計的方法を社会学のアプローチの柱とする考え方に対する理解はあまり得られず、オグバーンの赴任は同学科における「統計手法対事例研究法」をめぐる一大論争のきっかけをもたらした。事例研究派(反統計派)の代表者はパークであった。パークは統計学の需要が高まる状況の中で、あくまでも統計手法は社会学研究において二次的なものであると主張し続けたが、彼の統計に対する批判的な態度は逆に1920年代からの社会調査における量的概念の重要性をきわめだせる結果となった<sup>24)</sup>。

こうした流れからもわかるように GLS が設立された1920年代後半にはシカゴ学派は実証的・経験主義的手法をすでに存分に開花させ、この学派の弱点ともいわれていた数量化研究の欠落を補正すべく新たに量的概念を

重視したアプローチに転じようとしていたのである。またこの時期シカゴ大学全体に社会科学の総合化をめざす動向が見られたが、その動きは政策決定に社会科学の知識を導入しようとしていた政府の要請とも合致するものであった。これ以後シカゴ大学において社会学・心理学・政治学・人類学等の研究者の共同研究が多くなされるようになったことは<sup>25)</sup>、GLSの図書館学の研究環境を考へて行く上でも見逃すことのできない点といえよう。

## 2.2 シカゴ大学と GLS の交流関係

GLS はシカゴ大学の内部に置かれたライブラリー・スクールとして創設当初からシカゴ大学他学部との交流という課題を意識していた。1928年に出された GLS の公式の要項にはすでに関連学部での研究を意図した以下のような記述がある。

GLS の学生はシカゴ大学他学部の研究に加わることができる。図書館学と関係がありながら GLS で開講されていない多くの学問領域があるが、そうした領域については GLS の学生はシカゴ大学他学部との交流によって研究を進めることになる<sup>26)</sup>。

社会学・教育学・政治学などの研究方法が図書館学研究において援用すべき重要な源として選ばれたが、研究の上での結びつきは開校初期から少しずつ変化していった。まず初代学部長のワークスは社会科学系統の研究の図書館学へのとりこみを意識しながら教授陣の人事を進めた。

ウェイブルズが学部長代行をしていたときは、彼自身教育学の領域から GLS に加わったという経緯もあり、他の分野の研究方法を彼自身が率先して図書館学に応用するとともに、図書館学研究法の講義の中で社会科学の研究手法の重要性について論じた。この時期の他学部との交流関係に関しては、1930年に発表された GLS の活動記録 (*Current Activities-GLS*) に詳しい。それによれば、歴史学・社会学・心理学・教育学部との間で「学部間共同研究」(Inter-Departmental Research) が行なわれた。その成果はサーストン (Louis L. Thurston) の「読書効果に関する心理学的研究」、リープス (Floyd W. Reeves) の「カレッジ図書館の経営とカレッジの経営の研究」、オグバーンの「図書館の社会的影響と社会変化の研究」、トンプソン (James Westfall Thompson) の「図書館史研究」、バトラー (Pierce Butler) の「ライブラリアンシップに関係する学問史の研究」、グレイ (William Scott Gray) の「公共図書館経営と成人読書に関する調査・研究」に結実した<sup>27)</sup>。

ここで挙げられた研究者の中でも特にグレイは特定の社会集団の持つ読書興味の存在を明らかにして、その後

GLS で多く行なわれることになるコミュニティにおける読書興味に関する研究の先駆けともいえる研究を行っており影響力は強かった。またウェイブルズの指導したミラー (Robert A. Miller) の博士論文 *The Relation of Reading Characteristics to Social Indexes* は社会学科のバージェスとの共同研究の成果であり『アメリカ社会学雑誌』に発表された<sup>28)</sup>。

ウィルソンは GLS 開校当初から行なわれてきた他学部との交流を引き続き積極的に奨励し定着させた。ウィルソンによれば図書館学においては研究テーマごとに援用すべき分野があり、例えば印刷史や図書館史を研究する場合は歴史学を、読書興味に関する研究であれば心理学を、あるいは分類の研究においては特定主題を並行して学ぶことが必要であった。実際例としてウィルソンはシカゴ大学教育学部のグレイによって行なわれている「読み易さ」(readability)の問題、心理学部のサーストンの「映画を使った児童の態度の発達」などを GLS と関連の深いテーマとして挙げている<sup>29)</sup>。また彼は研究手法として統計学を重視し、統計学が用いられる教育学・社会学・経済学・心理学・商学・数学などの学部の講義と演習を薦めた<sup>30)</sup>。こうして初期 GLS の学生は他学部の講義を聴講し、そのルートを通じて社会学の方法をはじめとする他の分野の研究手法を吸収したのであった<sup>31)</sup>。

GLS と他学部の交流は主に GLS が研究方法や研究を進める上でのアプローチを他領域から援用するという形で行なわれていたが、シカゴ大学他学部から GLS に対する評価もまったくないわけではなかった。例えばウェイブルズの著書 *People & Print: Social Aspects of Reading in the Depression* が出版されたとき、図書館界においてのみならずパークやリンド (Robert S. Lynd) といったシカゴ大学社会学科の人々の書評に取り上げられた<sup>32)</sup>。パークは同書を *Journal of Higher Education* の書評欄において「興味深い、焦点がぼやけている」

(interesting but obscure) と評した。パークは、社会学者には関係し合う個人からなる実在として社会を把握するタイプと、統計的・管理的単位として人間関係をとらえるタイプがあるが、ウェイブルズは後者であると指摘し、同書の内容は実質的には43の統計表であって、これらにあらわれた事実一つ一つは興味深いもののその解釈があいまいであると批判したのだった<sup>33)</sup>。しかしこの研究はウェイブルズの他の研究に比べれば、パークの指摘する統計への依存度は決して強くない。パークが読書研究の分野でそれまでに行なわれた研究状況を理解していなかったということを考慮に入れたとしても<sup>34)</sup>、読書研究そのものが発展段階にあって、社会学に比べればこ

の時点で学問的完成度の面で差があったことも事実として認めざるを得ない。

全体として見ればシカゴ大学はミシガン大学、イリノイ大学などと比べれば比較的規模も小さく、学部の枠を超えた共同研究が積極的なされており、GLS も例外ではなかったのであろう。しかし GLS の場合扱っているテーマの特殊性などもあって、共同研究よりもむしろシカゴ大学に流れる当時の最新の社会学研究の雰囲気を読書学に取りこんで研究を進めたと言った方が妥当かもしれない。そしてこうした他学部からの情報の吸収は主にウェイブルズを通じてなされたものであった。彼は研究上の知見や方法を図書館員からよりも、大学の同僚を通じて得ることが多かったようである。たとえば、政治学者のラスウェル (Harold Dwight Lasswell)、ラザースフェルド (Paul Felix Lazarsfeld) といったマス・コミュニケーションの領域で活躍する研究者や、著名な人類学者のレッドフィールド (Robert Redfield) などとウェイブルズは個人的な親交があった<sup>35)</sup>。

### 3. 初期 GLS における図書館学研究

GLS で最初の教授陣が組織された時、その主な焦点はライブラリアンシップ以外の分野からの教員の招聘に当てられていたが、それに加えて GLS がシカゴ大学において図書館学部以外の学部との交流を積極的に進め、社会学の研究手法がうまく図書館学に導入されたことにより、GLS は読書研究を中心とした数々のテーマを実証的手法で解明することに成功したことは前節で述べた通りである。つまり GLS は社会を研究対象として客観的に研究していたシカゴ大学社会学科の「社会学における科学の概念」を図書館学のアプローチの中に取り込み新しい図書館学を誕生させたのである。1930年代にシカゴで行なわれた図書館学を GLS のメンバーたちはそれまでこの分野で使われてきたライブラリアンシップという広義の用語を却下して、ライブラリー・サイエンスと呼んだ<sup>36)</sup>。ライブラリー・サイエンスは必ずしも GLS で初めて使われた語ではないが、その言葉を定着させたのは GLS であるといっていよう。

#### 3.1 初期 GLS の研究状況

GLS では多彩なメンバーがライブラリアンシップの関係領域を様々な方法で研究していたが、GLS に新しい研究手法を持ち込んだ中心人物はウェイブルズであった。彼の主導により行なわれた読書研究は初期 GLS を代表する研究であり、GLS の実績を確立した領域である。ウェイブルズは図書館学教育は受けておらず教育学の専門家であったが、図書館学と教育学の接点を読書研

究に見出し、1930年代の図書館学研究をリードした。彼は読書科学やライブラリアンシップを社会科学の一領域としてとらえ、教育学や社会科学の概念や方法論を読書研究や図書館研究に応用した。ウェイブルズは図書館の利用およびサービスに関する問題や、人々の読書傾向（何を読むのか、なぜ読むのか）という問題に対して社会調査を中心とした社会学のアプローチは特に有効であると認識していた<sup>37)</sup>。

実際にウェイブルズは社会集団の読書興味を様々な形で調査し、社会集団はグループ別に異なった読書興味を持つことを明らかにした。それまでシカゴ大学教育学部のグレイを中心に行なわれてきた読書研究によって社会集団別の読書行動のパターンの違いは明らかにされていたものの、読書興味まで掘り下げた研究はなされていなかった。というのもグレイは読書行動は読書興味がそのまま反映したものであるとの前提のもとで読書調査を行っていたからである。が、ウェイブルズはこの仮定に懐疑的で、読書興味と読書行動の間には深い溝があることを各種調査から結果として導きだした。そして読書興味がそのまま読書行動につながらないことは図書館における図書選択や図書館サービスに一部原因を帰することができることを指摘した<sup>38)</sup>。ウェイブルズの研究は「人々が潜在的に読みたいと思っている主題に探りを入れて、これに合致した図書を収集提供することこそ、図書選択の第一の課題である」ことを明らかにしたのであった<sup>39)</sup>。

ウェイブルズはすぐれた統計家で、経験による判断よりも調査結果や実験結果を重んじた人物であったといわれる<sup>40)</sup>。彼の代表的研究で、1931年に刊行されたタイラー (Ralph W. Tyler) との共著 *What People Want to Read About* では、統計分析やチェックリストを用いた社会科学の手法が多用されていることからわかる通り<sup>41)</sup>、GLS では他のライブラリー・スクールが行っていたアンケート調査、そして問題解決のための分析や統計処理において先進的立場にあった<sup>42)</sup>。

GLS の中でも特に成果が顕著にあらわれた読書研究のような社会科学系の研究ではシカゴ大学社会学科の研究手法の中でもデータ処理などに代表される統計的手法がうまく取り入れられ、こうしたアプローチは「GLS モデル」とでもいうべき新しい研究方法を確立したのだった。そしてウェイブルズをリーダーとする読書研究を中心とした新しい図書館学の流れはこの時期の図書館学界において圧倒的な優勢を誇り、ウェイブルズら GLS の研究者たちは、マッコーリン (Lionel Roy McColvin) が (図書館学) シカゴ学派と呼ぶような図書館界において最も影響力の強い研究集団となった<sup>43)</sup>。

確かに図書館学のある部分は数量的測定法や計算法になじみ、図書館に関するあらゆる問題を細かい要素に解体し、そこから一定の法則や理論を導くことがある程度可能である。それまでの図書館学は実践的・直観的・経験的アプローチに頼る時期がデューイ以後長く続いており、これを打破すること——つまり科学的手法の確立——が新しい図書館学を創造することと同義であると思われていたため、GLS で行なわれたこれらの研究方法はすぐさま図書館学研究において主流になっていった<sup>43)</sup>。

一方で GLS において歴史研究を中心とする人文科学系統の研究は影が薄いように見える。しかしながらこのことは GLS の人文科学系の研究が不振であったということではない。図書館学における人文科学的研究が本格的に行なわれたのもやはり GLS が初めてであり、GLS 創設の際招聘された講師も人文科学に属する研究者の方が多く、書誌学・図書館史・古文書学・博物館学などの研究は GLS 創設当初から行なわれてきたのである。にもかかわらず GLS を資金面で支えるカーネギー財団の関心は主として社会科学系の研究にあったため、研究支援の際それがはっきりとあらわれたのであった。すなわちこの時期財団から GLS に与えられた補助金のうち人文科学系の研究に使われた額は全体の10パーセントだけであった。バトラーやトンプソンが財団に提供した研究計画——印刷に関する研究、中世図書館の研究——は財団から支援が受けられなかった<sup>45)</sup>。

この社会科学系の研究と人文科学系の研究に対する援助の差異は、その当時学問界では社会科学の研究が人文科学のそれに比べ相対的に優勢であったこと、更には言えば研究において「実用性」が重んじられる傾向が顕著であったことを示しており、GLS の図書館学研究に対しても「実用に耐える学問」が要求されていたのである。そういった意味においてウェイプスズが GLS を代表する研究者として目立っていたのも当然である。

実際社会科学的研究と人文科学的研究は、図書館学が本質的にプラクティカルな部分とヒューマニスティックな部分を合わせ持っていることを示すような形で、GLS の内部に併存していた。この二派に関してシェラは“1930年代の GLS ではウィルソン以下スタッフが社会科学研究と人文科学的研究を統合するような学説を作り上げようと努力していたが、そうした努力にもかかわらず両者の真の統合はなしえなかった。もしウェイプスズとバトラーが同じ認識基盤に到達していたらシカゴのライブラリアンシップ教育や図書館学研究に対する貢献度はもっと高くなっていたであろう”と述べて、GLS 内部において人文科学・社会科学派の見地に差異

があったことを描写している<sup>46)</sup>。

しかし見解の相違はあったものの、特にこの両者の間で学問上の論争がおきた形跡はみられない。その理由としてもともと GLS 設立の際、複数の領域からスタッフが集められたことから明かであるように、異なる諸相を持つ図書館学の個別のテーマを個別に解決していくことが GLS において最初に掲げられた目標であったこと、また GLS においては内部の論争が起こる以前の問題として外部の批評に立ち向かわねばならない必要性にせまられていたことなどが考えられる。外部から GLS に向けられた批判や中傷と常に対峙する状態にあっては社会科学の研究者も人文科学の研究者も「見解の相違」を口にする余裕はなかったといえよう。つまり創設期の GLS においては教授陣は丸丸とあって GLS を防衛する側にまわり、「図書館学の科学研究」という研究精神における同一認識が彼らを堅固に結びつけていたのであった。

### 3.2 GLS における研究の概念

GLS が標榜していた「科学研究精神」とは、GLS がシカゴ大学との交流を通じて主として同大学社会科学から汲み取ったものにほかならないが、シカゴ大学社会科学において「科学」は一体どのように意味づけられていたのだろうか。

シカゴ大学社会科学創設当初に社会学はある部分で社会改良主義運動や社会事業的活動と重なるところがあったが、これに対し初代学科長のスモールは社会学における客観性と実証性を重視し社会問題に対処しようと試みた。同学科においてスモールの描いた「科学としての社会学」が確立されたのはパークによるところが大きい。パークはそれまで社会学が主に社会改良主義など実践的活動の下に置かれてきた現実を見据え、社会学とこれらの活動とを切り離そうとした<sup>47)</sup>。

科学としての社会学の確立のためにパークはシカゴ大学社会科学にあって社会学理論の構築に力を傾け、その試みは1921年に出版された *Introduction to the Science of Sociology* に結実した。パークとバージェスの共同執筆によるこの書物は「緑の聖書」(グリーン・バイブル)と称され、シカゴ学派を代表する理論書として支持を得た<sup>48)</sup>。同書はシカゴ大学社会科学においてだけでなく当時のアメリカの社会学界に大変強い影響を及ぼしたが、社会学の実践面での研究方法については、第1章の「社会学と社会科学」においてわずか16頁がさかれただけであった。‘introduction’と題されているものの、この書物は研究方法よりも社会学の底流にある理論的意義に焦点を当てていたのである<sup>49)</sup>。パークは



*Introduction to the Science of Sociology* の中で“社会原理を社会における実践の場に応用するためには、社会問題に関する徹底した研究と体系的な社会研究と経験的な社会科学が必要である”と述べているが<sup>50)</sup>、ここで「社会」という語を「図書館」という語に置き換えることによって GLS の研究モットーを表現することが可能である。こうした研究精神こそが GLS がシカゴ学派から受けた最大の影響であったのではないだろうか。

シカゴ大学社会学科においてパークが果たした役割、すなわち「研究の概念に着目し、図書館学の理論を組み立てようとする試み」は GLS においてはバトラーによってなされた。彼は社会的・心理学的・歴史的な視座を持って図書館学思想の構築に着手し、その成果は *An Introduction to Library Science* に結実した。この書物は GLS の公式のステイトメントではなかったが、そこに現われた見解は、GLS での研究プログラムやスクールにおける図書館学研究の目的や意義を彼独自の視点を持って総合的に表現するものであった<sup>51)</sup>。パークらによる著書が‘introduction’と題されているが入門書というより社会学を構成する様々な要素を解説していったように、バトラーもタイトルに‘introduction’とあるこの書で図書館学の研究手法を説いたのではなく「図書館学は科学たりえなければならぬ」という宣言を行なったのである。

バトラーは「感情の価値に関心を寄せるあまり、図書館員は自分のいる場が、聖なる文化を個人に伝授する、この世の神聖な僧院であるかのごとく思い至ることとなった」と述べて、図書館員たちは必要以上に科学を恐れ嫌悪していることをまず示した<sup>52)</sup>。そして図書館員たちはこれまで自己の経験のみにもとづいて職務を行ってきたが、こうした状態は改善されるべきであり、そのためにも少数の図書館の科学を研究する者が必要であると論じた。また科学的手法と図書館学に関しては彼は次のように考えていた。

特に図書館学は、近代人の気質にある思考の習性に本質的にそうことによって、初めて科学的となる。知的な総合をめざす道はすべて客観的現象から出発せねばいけない。そして現象は厳密な科学的観察により吟味される。構成要素が一つずつ分別され、それぞれの機能が決定されてゆく。活動をそれぞれ独立したものと見なして、その計量を行なうためには、あらん限りの方法が利用されることとなる<sup>53)</sup>。

一方でバトラーは図書館の扱う文献というものが人間の精神活動の賜物であり、その評価は主観的になりがちで、そのことが図書館学を科学の領域になりにくくして

いる事実を挙げ、図書館学に対する科学の適応の限界にも言及した<sup>54)</sup>。しかしながらバトラーは図書館とライブラリアンシップを社会的・知的影響力によってかたちづけられた現象としてとらえ、図書館の枠の中だけで行なわれてきた従来の研究とそこから導き出されてきた理論を越えた新しい図書館学を提唱したのである。

詳細に分析するならばバトラーとウェィプルズの図書館学に対する研究観は若干異なったものであった。それは先に述べたように彼らの立場の違い——社会学者と人文科学者の相違——やそこから派生する研究アプローチの差異によるものであるとカレットキーは論じている<sup>55)</sup>。しかしながらバトラーの *An Introduction to Library Science* は GLS のマニフェストとなるにふさわしい内容を持っており、この書物はライブラリアンシップを学問へと引き上げるための思想の拠所を表現する役割を果たした。つまりこの図書館学の哲学書の出現によって、GLS は改めて研究を支える思想的基盤を持ったのである。つまり GLS においてすでに確立していた個々の研究手法におけるフレームワークの理論的統合がバトラーによってなされたのである。こうした図書館学の認識論上の基盤が出現したことは GLS の図書館学研究の中でも特に評価できる成果といえよう。

しかしここでバトラーの思想がデュエイ時代のライブラリアンシップから始まった図書館学の最終的な到達点と言ってしまうことには問題があるだろう。なぜなら実践的知識の体系としての「ライブラリアンシップ」、図書館に関する科学的研究領域としての「ライブラリー・サイエンス」、そしてこの両者を支える「ヒューマニスティックな図書館学思想」は GLS においてそれぞれ並列して存在していたからである。この三者は簡単に統合することのできない図書館学の構成要素であり、こうした異質のものを抱えこみながら学問を発展させていかなければならなかったところに GLS 創設期の困難さがあったのである。2代目学部長ウィルソンによってこの三者はかなり方向性を揃えて図書館学発展へと向かっていったように見える。しかしながら本質的に異なった性質を持つ三者を完全に融合することは不可能なのである。この三者の異質性から生じる矛盾を図書館学の重要なテーマとして掲げ、実践と離反することなく研究を進め一つの思想を組み立てていこうとする試みがなされた場として GLS をとらえることができる。

## おわりに

本稿を締めくくるにあたってここで再び「GLS はいかなる研究集団であったのか」を全体的視野に立って位置づけたい。

GLS はシカゴ大学の中に設置され、その結果 GLS がシカゴ学派の社会学から特に学問上の影響を強く受けたことをこれまで論じてきた。しかし GLS はシカゴ学派の社会学研究をそのまま踏襲したわけではなく、両者の間には相違点を多々見いだすことができる。最大の違いは研究手法に現われる。すなわちシカゴ学派は社会学において実証主義手法を確立した集団としての面を強調されることが多いが、実際には「参与観察」を中心とした定性的な研究を重視していた。これに対し GLS は測定やデータ処理といった定量的手続きによる問題解決が主流であった。GLS で行なわれていたようなどちらかといえば統計に比重を置いた研究手法は主にギディングスの率いるコロンビア大学で盛んであり、彼の教えを受けたオグバーンがシカゴ大学に赴任することで、シカゴ大学も統計を重視する傾向を持ち始めたということはすでに述べた通りである。GLS はいかなればシカゴ学派が「参与観察」を中心としたミクロの研究からその方向性を転じて大量のデータを扱うような研究に取り組み始め、政策科学の一端を担おうとしはじめたときの同学派と接触を持つことになった。しかも GLS が研究の黄金時代にさしかかっていた同時期にアメリカでは統計を主体にした社会調査が隆盛期を迎えていたのである。

GLS のメンバーや GLS の卒業生を含む1930年代以後の図書館学研究者たちの多くは、自らのテーマを量的測定法を中心とした「自然科学の方法論的手続き」によって解明していくようになった。こうした状況に関してハリスは広義の意味での実証主義が GLS の研究の中心となる思想であったと論じた<sup>56)</sup>。GLS において確立した図書館学の思想的基盤を実証主義と呼ぶことが果たして妥当であるかどうかについては更に検討が必要である。だがある意味で、GLS が社会科学分野から影響を受けた際、当時の社会学において主流となっていた実証主義寄りの社会科学思想を汲み取ったことは事実であろう。

図書館学においてハリスのいうところの実証主義がこれほどまでに優勢となった原因の一つとして、図書館領域における図書館界の存在が挙げられる。図書館学は図書館という現場抜きにしてはありえず、従って現場を支える理論や思想を持つことが図書館学の最大の使命であった。そして従来この領域は「直観的・神秘主義的アプローチ」が主であって、図書館学研究にかかわる大多数が「科学的」な理論を求めていた。そこに現われたのが実証主義寄りの科学思想であった。図書館の実務を支える思想は実証的な考え方と非常になじみ易く、実証主義寄りの思想は図書館学に対して望まれていた理論としてふさわしいものであったのである。

そうした中で「図書館学に対する科学的方法の適用」

への懐疑はバトラーからあらわれた。バトラーは GLS の創設期には、図書館学における科学的方法の重要性を主張していた中心人物であった。創設当時の GLS は外部からの批判にこたえるための思想的支えを「科学的」なものに求めており、その結果バトラーのような人文主義者でさえも「科学的であること」を研究の上で過度に強調しなければならない状況にあった。確かに1930年代の始めはライブラリー・サイエンス自体が未熟で、従来この分野において主流であった経験的アプローチを学問のレベルに引き上げるために「科学的思想」を持つことが大きな課題であり、バトラーもその一端を担っていた。しかしライブラリー・サイエンスが学問分野として確立した1950年代になってバトラーは科学的方法に対して批判を呈したのである。

彼は1951年に「Librarianship as a Profession」という論文の中で科学に対する懐疑を次のように表現した。

一番危惧されるのは、図書館員の間に科学に対する幻想——思い違いがあることだ。ライブラリアンシップはそれが科学であるときだけプロフェッションであるというまちがった認識がなされているようである。しかしこのような誤った解釈の背後にある思潮は何も図書館員だけのものではなく時代的な傾向でもある。長い間我々は科学というものが自分たちに恩恵を施してくれるものと思っていた。しかしこの結論は非現実的である。というのも科学的思想と人間の経験の性質とは著しい対照をなすからである<sup>57)</sup>。

しかし彼は科学的な考え方を図書館学に持ち込むことを全否定したのではなかった。彼は図書館学における問題すべてが定量的な方法に還元されはしないものの、合理的に観察され、記述され、分類され、評価されることは可能である、と考えていた。そして1920年代から1950年代に至る30年間のライブラリアンシップの最も大きな知的達成は、いくつかのテーマにおいて構築された堅固な基礎に基づいたライブラリー・サイエンスの確立であったことを認めている<sup>58)</sup>。

バトラーはライブラリアンシップを構成する三要素として、研究主題を科学的に処理するための原則としての「サイエンス」、特定の機器を取り扱うための「テクノロジー」、そして人間性の研究を通じてのみ理解しうる文化的動機を探るための「ヒューマニティー」を挙げたが、多くの研究者は堅固なサイエンスと効率の良いテクノロジーを希求していると論じ、実証主義に依存しすぎた図書館学に対して警鐘を鳴らしたのであった<sup>59)</sup>。しかしこうした実証主義に依存しすぎた図書館学への懐疑や批判がバトラーからあらわれた以後、図書館学をめぐる

認識論上の問題が図書館学研究の間で論じられることはあまりなかった。

一方 GLS が確立した科学的方法を重んじた図書館学はますます優勢を誇るようになり、GLS を含む図書館学部は“図書館学を明確な一つの分野として定義しようとする強い願望の結果として……中略……完結した（図書館学の）大学院プログラムを提供することで自らの権利を失うまいとするようになっていった”<sup>60)</sup>。こうした傾向は GLS においてははっきりと現われた。すなわち最初に GLS に集められた講師陣は多彩で、初期 GLS ではライブラリアンシップ以外の領域におけるスタッフが多くの研究を行っていた。しかしスタッフに関する初期の方針は GLS の卒業生がスタッフに加わるようになってから徐々に変わっていった<sup>61)</sup>。

つまり GLS は研究体制を内部で確立していくほどに学問界からは孤立していく傾向にあった。しかも知的孤立のタイミングは実に悪かった。なぜなら初期 GLS の研究者たちがライブラリー・サイエンスを向上させると確信し、学問上の手本にしていた社会学者たちは、GLS が学問上孤立しはじめたときに、自らの学問を問い直すことを始めたからである<sup>62)</sup>。社会学者たちは「研究の本質や役割について」自分たちの考えを再検討しはじめた<sup>63)</sup>。こうした見直しは、1962年に刊行されたクーン (Thomas S. Kuhn) の『科学革命の構造』をきっかけとして始まり、研究者たちは自分たちがこれまで信じてきた社会科学における「社会に関する科学的知識の着実な進歩」や社会科学における「客観性の獲得」を再考しはじめたのであった<sup>64)</sup>。

社会科学における研究概念の再検討の動きは1970年代に入ってから続き“自己の存在についてラディカルに問いを立て、それと答えることができれば、社会学者自身の存在の根拠が否定されるかもしれぬという、社会学者のアイデンティティーの危機ともかわる危機意識”といった厳しい姿勢を社会学者に要求するものになった<sup>65)</sup>。このようなテーマはその後社会科学を中心に繰り返し論じられてきており現在にいたっている。社会科学の場合学問の理論的基盤が繰り返し問われていく過程で学問の意義が明らかにされてきた状態に比べ、図書館学においては認識論上の問題や図書館学理論の見直しにあまり発展が見られない事実は大きな問題点として挙げられる。その原因を図書館学界における GLS の独走体制に一部帰すことができるのなら、出発点において隣接領域の新しい研究成果を取り入れていたにもかかわらず、GLS がなぜ学問的に孤立するようになっていったのかを更に詳しく研究する必要があるだろう。

最初の正式な図書館学教育の場であったデューイのラ

イブラリー・スクールは長きにわたって図書館界に影響を与え続けたにもかかわらず、その後ウィリアムン・レポートをはじめとする新たな図書館学への要請により批評の対象となった。そしてデューイのライブラリー・スクールを乗り越えることを目標として設立された GLS が図書館学を学問的に大いに向上させ、ライブラリアンシップの歴史の大きな転換点となったことを本稿では GLS をめぐる諸事象から論じてきた。図書館学研究を更に発展させるために、今後は GLS に対して批評的な視座を持って研究に臨むことによって、図書館学の新たな理論が生み出されてくるのではないだろうか。

**謝辞** 本研究を進めるに当たり、図書館情報大学の佐藤隆司先生と根本彰先生に御指導をいただきました。ここにお名前を記して深い感謝の意を表わします。

## 注

- 1) Harris, Michael H. "The dialectic of defeat: antinomies in research in library and information science," *Library Trends*. Vol. 34, No. 3, 1986, p. 515-534. (Harris, Michael H. 「第一論文 勝敗の弁証法：図書館情報学研究におけるアンチノミー」『図書館の社会理論』根本彰編訳、青弓社、1991, p. 13-42).
- 2) Shera, Jesse H. *The Foundations of Education for Librarianship*. New York, Wiley, 1972, 511p. (Information Sciences Series)
- 3) Richardson, John., Jr. *The Spirit of Inquiry: The Graduate Library School at Chicago, 1921-51*. Chicago, ALA, 1982, 238p.
- 4) Karetzky, Stephan. *Reading Research and Librarianship: A History and Analysis*. West Port, Conn., Greenwood, 1982, 385p.
- 5) 河井弘志『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会、1987, 483p.
- 6) 川崎良孝『アメリカ公立図書館成立思想史』日本図書館協会、1991, 335p.
- 7) Vann, Sarah K. *Training for Librarianship before 1923*. Chicago, ALA, 1961, p. 169-170.
- 8) Churchwell, Charles D. *The Shaping of American Library Education*. Chicago, ALA, 1975, p. 43. (ACRC Publications in Librarianship, Nn. 36)
- 9) Keppel, F. P. "The Carnegie Corporation and the Graduate Library School: a historical outline," *Library Quarterly*. Vol. 1, No. 1, June

- 1931, p. 22.
- 10) Richardson, op. cit. 3), p. 10.
- 11) Ibid., p. 43.
- 12) "The Graduate Library School, 1928-29," *University of Chicago Announcements*. 28, June 20, 1928, p. 3.
- 13) Works, George Alan. "Research and the graduate library schools," *Libraries*. 33, Feb. 1928, p. 102.
- 14) Richardson, op. cit. 3), p. 63.
- 15) Ibid., p. 45.
- 16) Waples, Douglas. "Current Activities : Graduate Library School," *GLS Papers*. Dec. 1930, p. 4.
- 17) Richardson, op. cit. 3), p. 108.
- 18) Ibid., p. 118-119.
- 19) Houser, Lloyd; Schrader, Alvin M. *The Search for a Scientific Profession : Library Science Education in the U. S. & Canada*. Metuchen, N. J., Scarecrow, 1978, p. 48.
- 20) Shera, Jesse H. "Education for librarianship : an assessment and a perspective; a review article," *Library Quarterly*. Vol. 49, No. 3, 1979, p. 310-316.
- 21) 矢沢修次郎『現代アメリカ社会学史研究』東京大学出版, 1984, p. 154.
- 22) 河井弘志「シカゴ学派の読書研究 (I)」『図書館学会年報』Vol. 26, No. 2, June 1980, p. 91-92.
- 23) 同書, p. 92.
- 24) 鈴木広はか編『都市化の社会学理論 : シカゴ学派からの展開』ミネルヴァ書房, 1987, p. 13.
- 25) 矢沢, 前掲 21), p. 199.
- 26) op. cit. 12), p. 13.
- 27) Waples, op. cit. 16), p. 2.
- 28) Karetzky, 4), p. 153.
- 29) Wilson, Louis Round. "The development of a program of research in library science in the Graduate Library School," *Library Journal*. Vol. 59, Oct. 1934, p. 742.
- 30) Ibid., p. 743.
- 31) 河井, 前掲 22), p. 91.
- 32) Karetzky, op. cit. 4), p. 147.
- 33) Ibid., p. 113.
- 34) Ibid., p. 113.
- 35) Ibid., p. 146-147.
- 36) Richardson, op. cit. 3), p. 121.
- 37) Karetzky, op. cit. 4), p. 51.
- 38) 河井, 前掲 5) p. 282.
- 39) 河井弘志「シカゴ学派の読書研究 (II)」『図書館学会年報』Vol. 26, No. 3, Sep. 1980, p. 115.
- 40) Karetzky, op. cit. 4), p. 93.
- 41) Ibid., p. 95.
- 42) Richardson, op. cit. 3), p. 124.
- 43) 河井, 前掲 39), p. 253.
- 44) Harris, 前掲 1), p. 20-21.
- 45) Richardson, op. cit. 3), p. 124.
- 46) Shera, op. cit. 2), p. 408.
- 47) 秋元律郎『都市社会学の源流』有斐閣, 1989, p. 118.
- 48) 同書, p. 118.
- 49) Bulmer, Martin. *The Chicago School of Sociology : Institutionalization, Diversity, and the Rise of Sociological Research*. Chicago, University of Chicago Press, 1984, p. 95. (The Heritage of Sociology)
- 50) Park, Robert E.; Burgess, Ernest W. *Introduction to the Science of Sociology : Including the Original Index to Basic Sociological Concepts*. 3rd. rev. ed. Chicago, University of Chicago Press, 1969, p. 57.
- 51) Butler, Pierce. *An Introduction to Library Science*. Chicago, University of Chicago Press, 1933, 118p.
- 52) Butler, Pierce. 『図書館学序説』[*An Introduction to Library Science*] 藤野幸雄訳, 日本図書館協会, 1978, p. 24-25.
- 53) 同書, p. 50.
- 54) 同書, p. 52-53.
- 55) Karetzky, op. cit. 4), p. 66.
- 56) Harris, op. cit. 1), p. 20-21.
- 57) Butler, Pierce. "Librarianship as a profession" *Landmarks of library Literature, 1876-1976*. Ellsworth, Dianne J.; Stevens, Norman D., eds. Metuchen, N. J., Scarecrow, 1976, p. 29.
- 58) Ibid., p. 29.
- 59) Ibid., p. 33.
- 60) Harris, 前掲, 1), p. 22.
- 61) 同書, p. 22.
- 62) 同書, p. 23.
- 63) 同書, p. 24.
- 64) 同書, p. 23.
- 65) 新 陸人, 三沢謙一編『現代アメリカの社会学理論』恒星社厚生閣, 1988, p. 268.